

1 Ja-3 ファッション・ブックにみるジュエリー II

○研谷 悦子 伊藤 紀之

(共立女大)

《目的》 前報の「ファッション・ブックにみるジュエリーI」では、“ギャルリー・デ・モード・エ・コスチューム・フランセーズ”を資料とし、1778～87年のジュエリーの装いの傾向について報告した。これに引き続き、今回は1830年代から40年代の傾向について検討する。

《方法》 資料として“ザ・レディズ・ポケット・マガジン (The Ladies Pocket Magazine) ”, “ザ・コート, レディース・マガジン, マンスリー・クリティック・アンド・ミュージアム (The Court, Lady's Magazine, Monthly Critic and Museum) ”, “ラ・モード (La Mode) ”の3誌を用い、これらのプレートをデイ・ドレスとイヴニング・ドレスの2種に分け、各年代ごとに、描かれているジュエリーを分類し、その割合を調べた。

《結果》 デイ・ドレスでは、1830年代前半は、ブローチやブレスレット、ベルトのバックルが、後半はブローチが装いの中心であった。40年代もブローチが多く見られたが、全体にジュエリーはあまり装われなくなり、ブローチとブレスレットが復活した後半も、その傾向が続いた。イヴニング・ドレスでは、1830年代前半は、ネックレスとイヤリングを基本に3～4種類が装われたが、後半は、ネックレスとブローチが好んで着用された。しかし、40年代には、何も装わない事が多くなり、後半には、ブレスレット以外のジュエリーは全く姿を消した。このように、デイ・ドレスとイヴニング・ドレスとにおけるジュエリー着用の違いは元より、年代ごとの傾向も明らかになった。